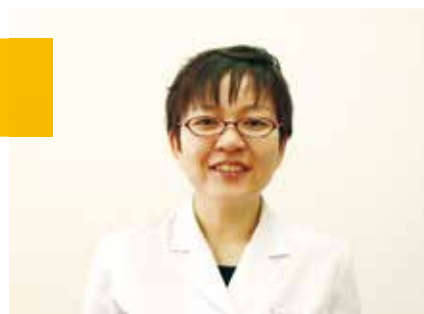


# 在宅薬剤師『やまね』の訪問日記

第14回

株式会社ファーマシイ 山根 暁子



「人間は二度死ぬ」という言葉を聞いたことがある。  
引用しようと辞典を調べると、意外にも近代の俳優の言葉だった。あまりに金言なので、古代ローマだとか中世ヨーロッパだとかの思想家の言葉のように思い込んでいた。  
人間は肉体が減びたときだけでなく、そのあとで皆の記憶から消えたときにもう一度死ぬとの意味だが、見方を変えると「人は肉体が減んだあとも愛する存在に影響を与えられる」わけで、すべての存在に課せられた死、消滅という運命を考える際に、逝く者にとっても遺される者にとっても、よすがとなると感じる。どちらかと言えば、現世で生きている者を慰める意味合いでたびたび思い出す言葉だ。

\*

もう直接、話しはできない、とても大切な人たちがいる。そのうちのおひとりの話。「師・先生」という言葉以外では、その人をうまく表現できない。大学教授をされていたが、私といわゆる師弟関係はないので、じかに何かを授かったわけではない。しかし私は、その方の教え子を通して多くの言葉や考え方を教わった。

先生は、大学で学ぶ専門知識が社会の役に立つことをめざし、教え子にそのための姿勢を伝える方。知識の伝授だけではなく知性を育てる方。よく見せようだとか、いいことを言ってやろうというのではなく、そのとき相対している存在に向けて、常に誠実に真心の対応をされる方だった。

私の働く薬局に、「薬局薬剤師の在宅医療参画の実情

を見せてほしい」と言う学生さんが来る。患者さんのお宅までの移動時間などに、なんととはなしにいろいろな話をする。彼らの中にときどき、くだんの先生のかげらを見せてくれる門下生がいる。先日、見学に来てくれた学生さんと、先生の人となり言葉を描き出そうとして、ひとしきり盛り上がり話した。

不思議な時間だった。亡き人を偲ぶ、と言え、しみみりした空気になりやすいが、そうではなく、先生が自分たちの中に生きているのを再確認する作業だ。先生を思い出すと、社会のために知性を使わねばならないとの気持ちになるのだ。そして、初対面のその学生さんと先生を介して融和させてもらう感覚。心の深いところを話せる友になれる予感がした。

その場にいないのに先生は生きていて、私たちが今も成長させてくれ、同志とめぐり合わせてくれる。その学生さんが「なんだか、先生がいない人とは思えない」と言った。まったく同感だった。肉体がある存在以上にそのとき、その場所に先生は生きていた。

\*

「人間は二度死ぬ、肉体が減びたときと、人々に忘れ去られたとき」——。ならば、先生は永遠に生きておられ、私は先生に、弟子たちを通じて今後も出会えるだろう。門下生全員の中に生き、そして彼らが社会に役立つことで、その意識は未来に継承されていく。

直接の門下生ではないからこそ、余計にすばらしいものが継承されていく様子を実感できたのかもしれない。死を超越する「希望」を体験させてもらった。